

## 「科学技術の智」の新たな展開

皆さま

暫く「科学技術の智プロジェクト」のホームページが動かず皆さまにご心配をお掛けしました。

2010年に総合報告書をまとめ、その中で様々な提案をしましたが、それを実現するための戦略と財政的基盤を確立することが出来ずにおりました。しかしながら、我々が手をこまねいているうちに2011年3月11日の出来事が起こりました。まさに「科学技術の智」がすべての国民に共有されていたならば、最善とは言えなくても、何らかの対応ができたのではないか、と思いました。しかし、一方で「科学技術の智」には限界もあったと思います。なぜなら、そこでの主調は、科学的な考えを伝えて共有するところでしたので、必ずしも社会的行動を決めるところまでは視野に意識されていなかったのではないか、と思います。本当に100パーセントの安全はあるのだろうか。ないとすれば、どのようにして暫定的な決定をしていくべきか。そのような科学だけではとらえきれない課題についても向き合うことが、「科学技術の智」の中にもっと意識される必要があります。

一方で、「科学技術の智プロジェクト」によって提起されたことは、各地における科学技術の啓発活動を産みだしました。特に三鷹地域における「科学リテラシー講座」「科学リテラシーカフェ」などが実施されました。また高等教育の質保証についても、「協働する智」という概念を中心に据えて、学びのコアを言語化する営みがなされるようになりました。また、「科学技術の智プロジェクト」の国際展開としてのESD(Education for Sustainable Development)も日本南アの初等中等教育の現場でなされました。そこでは、持続可能性の概念自体が、先進国と発展途上国とで異なることも明らかとなりました。

したがって、豊かな社会のための「科学技術の智」というときに、「豊かさ」とは何かにも多様性があることも大事なことです。さらに、今後は、様々な科学技術の情報が流れる中で、冷静な判断、敏速な対応、多様性を超えて協力する協働

性、をいかに構築するか、ということが問われています。

その意味で、3.11 以後の「科学技術の智」の在り方を再度検証すべきであると思います。

これからは、総合報告書で提起されている様々な提案の実施と共に、さらなる「屈強な」国民、すなわち、冷静さ、敏速さ、協働性をもって、様々な危機を乗り越えて持続する社会の構築を目指すべきであると思います。

幸いなことに、科学技術リテラシーの新たな展開と、そのリテラシーに基づく持続的社会的構築を目指す事業と調査研究を行う機関として「科学コミュニケーションセンター」が設立されましたので、National Center として「科学技術の智」の新たな展開を進めていきたいと思っています。

科学コミュニケーションセンター主監 北原和夫